

「県民と県議会との意見交換会」 山田町会場 の概要

〔日 時〕 令和6年4月23日（火）13：00～14：59

〔場 所〕 県立陸中海岸青少年の家A・B研修室

〔テーマ〕 沿岸地域の魅力と地域課題について

〔参加者〕 （6名）

中 村 菜 摘（宮古市地域おこし協力隊）

佐 藤 奏 子（株式会社かまいしDMC 地域創生事業部根浜・箱白マネージャー）

多 勢 太 一（一般社団法人陸前高田市観光物産協会 事務局員）

中 本 健 太（株式会社バニッシュ・スタンダード プログラマー兼漁師）

赤 瀬 凱（山田町地域おこし協力隊）

澤 里 寛 行（株式会社澤里技研 代表取締役 元岩泉町地域おこし協力隊）

〔出席議員〕（8名）

畠山茂議員（座長）、上原康樹議員、大久保隆規議員、岩崎友一議員、

佐々木宣和議員、高橋こうすけ議員、千葉盛議員、田中辰也議員

◆ 参加者自己紹介及び現在の活動状況等について

○中村さん

2023年6月から地域おこし協力隊に着任している。重茂の漁師である夫と結婚し、神奈川県から宮古市にIターンした。

重茂がすごく大好きで、どうしたら重茂を押し出していけるのかということばかり考えている。その中で4月から漁家民泊を始めたが、最初の客がミュージシャンの方だったので、そういう方向で行くのかとドキドキしている。

地域おこし協力隊は任期があり、その後どうやって生きていくかというところで、普通は人生でこんな体験をできないと考え、いわて水産アカデミーに入学し、漁師になろうと思っている。今は師匠に教えてもらいながら学んでおり、直近の夢は、自分の刺し網でとれた魚をその日のうちにお客さんに出すことである。

○佐藤さん

釜石市の根浜海岸から来た。東京都出身で、東日本大震災津波の日に、環境関連のプロジェクトで岩手県にいたことがきっかけで、そのまま被災地支援という形がかかわり、気がついたら釜石市に住んでいた。親族が誰もいない中でたくさんの地元の方によくしていただき、御縁をいただいて、ここに住み続けられている。

夫は愛知県出身で、東京都で従事していたが、復興支援で釜援隊として赴任した。5歳の息子の子育てをしながら釜石市鶴住居町に住んでいる。

もともと海が大好きで、海関係の雑誌社の記者をしていた。根浜シーサイドがラグビーワールドカップ2019™を機にオープンするとき、オープニングスタッフとして株式会社かまいしDMCに入った。そこで施設管理だけではなく、何か地域創生につながることを、と思い、いろいろなことをコーディネートする活動もしている。

夫がいわて水産アカデミーの第3期生で、漁師3年目である。根浜の漁家民泊の親方の下について漁師生活をしており、もともと漁業体験を行っているNPOに釜援隊として従事していたことから、思いを深くして漁師になろうと頑張っている。

まさに一家で海辺に移住したらどうなるかということを実践している。とても自然豊かな場所

で、本当にすばらしいと思い、子育てでいろいろありながらも楽しんでいる。

○多勢さん

千葉県船橋市の出身。東京都内の大学卒業後、都内の人材会社に入り、法人営業を数年間していた。陸前高田市には2020年9月末に地域おこし協力隊として移住し、任期終了後もそのまま観光物産協会にお世話になっている。

仕事の内容は、主にSNSやホームページを使った情報発信で、もう1人の2年目の地域おこし協力隊員と一緒に、特に今、はやっているリアル動画などを活用している。

移住してから、みちのく潮風トレイルにはまってしまい、岩手県は1,000キロあるが、そのうちの500キロ以上は歩いている。重茂半島は当然歩いており、すごくいいところ。お話を聞いて中村さんの民宿に泊まりたいと思った。

陸前高田市にもみちのく潮風トレイルのルートが40キロ弱あるので、それを活用して地域活性化ができないかと思っている。今まで地元のクラフトビール屋と一緒に高田トレイルエールという商品を開発したり、ピーカンナッツの工場と販売店舗があるサロンドロワイヤルとトレイルナッツという商品のパッケージを一緒につくったりしてきた。そういったみちのく潮風トレイルを軸とした商品開発や、もちろんツアーの受け入れも力を入れて頑張ってきたところ。

妻と一緒に移住してきたが、陸前高田市で移住コーディネーターをしている。移住について妻から聞いてきた話もあるので、その辺も含めていい議論ができればと思っている。

○中本さん

埼玉県浦和市の出身。幼いころから海や魚釣りが大好きだった。そこで、東京大学農学部の旧水産科、海洋政策環境科学専修に進学した。大学卒業後は大学院に進学し、所属していた研究室が大槌町の国際沿岸海洋研究センターであった関係で、2015年に博士課程の大学院生として大槌町にきた。大学院では、海洋生物、特に藻場生態系における海藻類とそこに生息する動物の関係性、種間相互作用を研究していた。博士号を取得して客員研究員として働いていたが、病気をきっかけに2020年に退職した。

退職後は大槌町内の漁協システムの開発、保守の会社でプログラマーとして働き、2021年に新おおつち漁業協同組合の組合員の資格を取得して、副業として漁業を始めた。

2022年には、現職の株式会社バニッシュ・スタンダードに転職した。原宿を本社とするIT企業だが、アパレル等の店舗スタッフのDX化を支援するSTAFF STARTというB to BのSaaS型のビジネスをしており、そこでスマホアプリを作成するプログラマーとしてリモートで働いている。

漁業については、ウニ、アワビ、ナマコを対象とした採介藻漁業やタコをメインとしたかご漁、アブラメ、ソイの刺し網漁、ホヤの養殖もしている。

けさも4時からタコのかご漁に行ってきた。趣味も釣りで、暇があれば沖に行ってみたり、川で釣りをしたりする。

○赤瀬さん

出身は北上市だが、父の実家が船越半島である。僕も田の浜地域に思い切って家を買った。

高校卒業後に関東に行って教育関係の小さい会社に入ったが、ビルしか見たことがない子供たちに自然環境を教えることを、被災地に会社を設立して雇用もふやしながらやりたいという話が出たので、自分は山田町に縁があると社内プレゼンをしたところ、山田町でそういうことをしようとなった。いきなり地域のことも知らずに会社を設立しても多分失敗するだろう、地域のことを学び、行政の内部を知ってから、ということで地域おこし協力隊に入り、今年3年目である。

地域おこし協力隊の仕事内容は、最初はSNS担当で入ったのだが、地域の課題を解決していくうちに、気づいたら今はほとんど農林課でクマやシカの対処で鉄砲を撃っている。

また、漁師の家系で船を持っており、漁業協同組合に加入する予定である。

海と山のりょうし（漁師・猟師）と、耕作放棄地を農地として再生する会社を立ち上げるために、北上市から幼なじみを2人山田町に移住させて、3人体制で進める予定である。けさも2頭のシカの対処をしてきて、現場の格好で来ている。

○澤里さん

もともと岩泉町出身で、この施設にも小学生のころに来たことを覚えている。私は台風10号の災害ボランティアとして岩泉町に戻ってきた際にUターンを決意し、エンジニアをしていた経験を生かして地域の課題解決ができるのではないかと地域おこし協力隊にエントリーした。

地域おこし協力隊にはフリーテーマで着任したが、最初に着手した鳥獣被害対策が需要、要望とも非常に反響が大きく、3年間ほとんどその活動をしてきた。

鳥獣被害対策としてわなによる捕獲が実施されているが、わなは原則毎日の見回りが必要で、従事者にとって非常に負担が大きい状況があった。見回りに伴う車の燃料の消費も多く、また、見回りそのものが危険を伴う業務であることもわかった。

そこで、ICT、IoTを活用し、わなの見回りを遠隔で行うシステムを開発した。岩泉猟友会の協力のもと3年間にわたり実証試験と改良を繰り返した結果、遠隔わなの捕獲検知システムの特許を取得することができた。令和6年度以降はこのシステムを事業化し、収益化を図りたいと考えている。

また、ツキノワグマパトロールとして人身被害防止を目的としたドローンによる夜間ツキノワグマ探知飛行を実施した。資料の写真の1番の黄色い円が夜間ドローンで調査をした範囲で、赤いバツ印がツキノワグマが確認された場所である。灰色のバツ印は令和4年度にツキノワグマがいたところであるが、作付を放棄した畑の位置となる。ドローンで実際の生態を確認したところ、想像以上に危機的な状況であることがわかり、本来、住民に対する注意喚起も目的としていたが、あまりに深刻な状況で、ただ単に不安をあおる結果になってしまうと注意喚起ができなかった。

岩泉町に住んでいる方々はクマがいるのが当たり前になってしまっているが、移住してきた方にとっては大変不安らしく、自然の中で子供を遊ばせたいという理想を抱いて来たにもかかわらず、それができないという状況になっている。

私は岩泉町出身なので、地元民としての立場、20年ぶりに家に戻ってきた者としての立場、また、鳥獣被害対策の対策班として活動しており、最前線に従事している者としてお伝えできることがあればと考えている。

◆ 意見交換

○高橋こうすけ議員

共通しているのは、移住してきて一生懸命に活動していることだと思うが、実際に移住を経験した皆様だからこそ感じていること、例えば、移住するとき大変だったこと、実際に住んでみて思っていたことと違ったこと、生活する上で大変だったこと、それから、前に住んでいたところはこうだったのに、こちらでももっとこうしたらいいのではなど、皆様のそれぞれの立場のお話を聞かせていただきたい。

〔回答：澤里さん〕

岩泉町に限った話になるが、社会の制度自体がひとり暮らし世帯を想定していないつくりになっている。草刈りなどの地域活動も、ある程度大きな世帯であいている人が1人いるという昔な

がらの家庭を前提としているが、単身で働いている家庭や2人暮らしで共働きという家庭では、昼間に活動してくれと言われてもできない。それでも当番は回ってきて、集金や、回覧板もポストに入れるだけではなく、申し送りがあって対面でないといけないこともある。昔の大きな家庭を前提としたシステムが限界にきているところがふえていていると感じている。

通常の生活においては、物流が発達しており、例えばネットショップで買ったものは翌日には全部届く。意外と生活には困らないが、今後、物流の担い手不足が直撃した場合どうなるかという不安が非常にある。事業展開をするにしても、大量の電子部品を東京都から取り寄せており、滞った場合、仕事にも支障が出てしまう不安を感じている。

【回答：赤瀬さん】

地域においてひとり暮らし世帯が対処できない、昼間に活動できないということは、僕もひしひしと感じる。そこでシルバー人材が対処できるのかということ、また別の問題になってくると思う。僕も婚約者を山田町に連れてきたが、いきなり地域のコミュニティに入れられて、草刈りなどを充てられたときには困ってしまうとは感じている。地域コミュニティの押しつけになり、地域とうまくいかなくなってしまうという人も実は2、3人知っている。うまくシルバー人材を生かしていくほうが良いという意見はある。

車が絶対に必要な社会という環境については、わかった上で移住しているので気にしていなかった。

【回答：中本さん】

大学院生として移住し、社会人のように集金などの業務は全く充てられなくて、そんなに大変だったと思う部分が多い。買い物に関してもネットショップを使えば普通に翌日や翌々日に届くので、大変だと思ったことも正直ない。強いて言えば、車を持ったのが初めてで、タイヤ交換は東京都ではしないので、どうすればいいかということだった。大変なのは車の維持ぐらいと思っている。

【回答：多勢さん】

私も同じで、そんなに普段の生活で不便だと思ったことは正直ない。ただ、先ほど回覧板の話があったが、私も妻も日中働いている中で、回覧板を早く回してほしいとか、出張で2人とも出かけていると、なかなか回ってこないと言われたことは結構あって、前提が違うのかとは私も思った。

私も東京都にいるときは車を運転しなかったが、こちらに来て三陸沿岸道路を走っていたら、急にトンネルの中でとまってしまったことがあった。オイル交換をしなければいけなかったらしく、全然知らなかったのがエンジンごと壊れてしまった。そういう前提知識がなく、勉強不足だったと思うことはあった。

あと一つ挙げるならば、親の介護。私も妻も実家が千葉県だが、妻の家族が病気を患っていることもあり、何度も新幹線を使って千葉県に戻って様子を見て、ということが大変と聞いている。そこは難しい、大変なところである。

【回答：佐藤さん】

子育てに関してだが、私も夫も不定休で、天気によって動く。観光施設であり土日にイベントが入って働くとなると、平日や土曜日は保育園に預けられるが、日曜日はどうするか、となる。私はキャンプ場施設で働いており、子供も5歳になりある程度大きくなったので、みんなで見ながら、ということが幸い実現しているが、両親とも移住者で親戚がいなくなると、両方とも抜けれないときに預けられる、そういったサポートがないと困ると思う。親族のようなかわりやつな

がりを持ってたらいいとは思いますが、なかなか移住者としても言いづらい。

もう一つは、不便さは全然感じないが、自分たちの給料に対する生活コスト。夫と私の2台の車の燃料費、少し古い家に住んでいるが灯油代、お風呂もプロパンガスとなると、東京都にいるときには考えられないような生活コストが実はかかっており、意外と賃金とランニングコストが合わない。子供がまだ1人なのでいいが、2人、3人と子供がいる移住者は課題として出てくるのではないかと思う。

【回答：中村さん】

移住してきて、子供が育つ環境としてはすごくいいと思った。重茂の特殊なところではあるが、歩いている子供たちがみんな丸々としている。食べ物にも困っていないし、遊ぶところもあるし、しかもおいしいものが多いのだろうとすごく思う。子供に苦勞をさせたくない人も多いと思うし、私もそう感じているので、子育てをするのが楽しみだとすごく感じている。

関連して、家は安いと思う。空き家利用の補助金も使わせてもらえるので、建てるようになったら多分とても高いのだけれども、あいている家を買う分には安いと感じている。

つい先日、大分県や熊本県の漁村の方とお話しする機会があり、女性が働けば働くほど周りの人が自分たちも働かなければいけないという感じになって、悪口を言われると聞いた。東北の沿岸の意見としては働けば働くほど認めてもらえるところがあると感じている。浜の母さんたちの強いところだと思うが、それは私の性分にも合っていて、働きたいといって働かせてもらえるのはありがたいと思う。

マイナスではなくおもしろいと思ったことで、大学を卒業してすぐ夫が重茂にUターンをしたが、卒業してきたばかりなのに結婚して子供がいると根も葉もないうわさが流れた。うわさがひとり歩きして、本人たちに確認をしないことが不思議だとは感じた。あとは、地域によって、この人は先輩だからここにしか頼めない、先輩だから義父も何も言えないなど、この人からという順番がしっかりある。また、地域の周りの人にすごく興味を持たれていると感じた。これをおもしろがれるのであればまだ大丈夫だが、移住してくるときの結構なハードルになるのかと思う。

また、給料が大卒と高卒で変わらないところが多いと感じている。そこがやはり関東などの出身者は考えてしまうところかと思った。

○高橋こうすけ議員

皆さんがおっしゃっていることはそのとおりで感じている。少しずつ変えていくところは変えていかなければいけないと思うが、なかなか地方は進んでいないところもある。

私も2歳の子供がおり、大変な部分もあるが、伸び伸びと子育てできる環境があると思っているし、そういういい面を伸ばしつつ、悪いところとして皆様からお話しいただいたところを、少しずつ改善できるように取り組んでいきたいと思っている。

○大久保隆規議員

水産業の担い手不足の中で、漁師の仕事を始めていると数人から紹介があり、非常にうれしく、またありがたく、興味深くお伺いした。今後担い手不足をどう解決していくかが岩手県の浜の活性化、水産業の振興にも大切な要素であり、実際にお仕事をされている中で、担い手不足の解決につながるような意見や問題点があれば、生の声としてお知らせいただきたい。

また、澤里さんは本当にすばらしい取り組みをされている。去年はクマの被害が過去最高で、国でも大きな動きが出てきている。冬眠から目覚めたクマが活動を開始し、岩手県でも最近、ツキノワグマの注意報が発令された。独自に開発をした鳥獣わな捕獲検知システムとドローンの活用について、もう少し細かく教えていただきたい。

【回答：佐藤さん】

私も夫も移住者なので、親族や知り合いがいない、物品も1個もない状態のゼロからスタートした。1年間いわて水産アカデミーに行き、非常にいい勉強、経験をさせていただいたが、やはり1年たったからといって、はい、とできるわけではない。夫はホタテ、ウニ、アワビ、ワカメをやっているが、近年はホタテも貝毒でなかなか厳しくて、値がかなり下がっており、今ちょうど踏ん張りどきである。新規で就業した漁業者に対するヒアリングや、もう少し何かサポートがほしい。いわて水産アカデミーでも終わった後にいろいろサポートがあるが、やはり現実は、というところである。やめていく漁師からいろいろ譲ってもらえばいいという考えもあるが、実際には皆さんなかなか譲らない。生涯現役の方が多く非常によいことだが、難しいと思う。今すぐ必要であれば購入しないといけませんが、一個一個の機材が高いため、ジレンマの中で何とか共働きで少しずつ収入を上げている状態である。

やりがいの部分、海をフィールドに生き物に触れてというところでは、非常に生き生きとできる、本当に皆さんが移住して求めているような環境ではあると思うので、もう少しそのあたりのサポートがあったらと思う。

【回答：中本さん】

担い手不足の解決の特効薬はないと正直思う。50歳代、60歳代の方がボリュームとして多く、その人たちがいなくなっていく分を若手で埋めるというのは厳しいとは思う。ただ、その50歳代、60歳代がいなくなった後に若手で入る人たちというのは、一人当たりの漁場は大きいし、たくさん養殖棚をもらえ、採算ベースで見るととても稼げると思うので、漁師はこれから可能性があると思 personal的には思う。漁師を始めて3年目で、正直1年目、2年目は赤字で相当厳しかったが、3年目にタコが結構とれて、こんなにもうかるのかと正直思ったので、ちゃんともうかるということと、入り口のところ、漁業協同組合に入るにはどうするかなど、ほとんどの人がわからないことなので、その辺の情報発信をきめ細やかにやっていくことは必要かと思う。

僕も船をもう少し大きくしたいと思っている。多分船を使っていない人はいるし、どこかに余っているとは思いますが、そこにアクセスしづらい。長崎県で漁船のリース事業を行っているが、そういうものを通して、船の譲り受けをやりやすくしていただければありがたいと思う。

【回答：赤瀬さん】

個人的に漁師担い手戦略は研修制度的なものだと思う。農業の話だが、僕の仲間も耕作放棄地を再生するための農業研修で、山田町荒川の法人農家のもとに行っている。山田町が研修費を出すので、農家としては持ち出しがなく、人手にもなり、教えることもできる。入ってくる人は、給料や生活の心配がないということがやはり一番である。漁師や農家は、個人事業主に飛び込むということから、どうしてもそういうところの不安が大きいので、お金を出してという話になってしまうが、やはり漁業研修を充実させないとだめだと思う。大学を出るときに、まあいいか、適当に内定をもらっておけばいい、と会社に入る人は多いが、この仕事をやりたい、これだ、といって入っていく人は本当に少ないと思う。このくらいの待遇なら漁師をやってもいいかという妥協から始まっても、絶対実るものは実ると思うので、研修制度を充実させてほしいといつも思っている。自分でやろうとするのは多分変態の類い、本当にまれに見るような人材だと思う。そこも貴重だが、一、二ランク下げたところの人材をどう引っ張るかという研修制度だと思う。

船の譲り受けの話もそう思う。田の浜にも何年も前から使っていない陸揚げされた船が大量にある。こういうところのマッチングも整備できればいいのではないかと思う。

【回答：中村さん】

漁師の町は、大変とわかっているから継がなくていいと家庭で教育されている方も多いと思う。重茂では、父さんと母さんが大変だからといって、うまく教育されていて帰巢本能で帰ってくるが、地縁血縁のない人間が新規漁業者として入り込んでくるとなると、漁師はやはりすごい覚悟がいる職業なのだろうと思う。ではライトに考えられるようになるためにどうしたらいいのか。それこそ地域おこし協力隊を利用したらいいと思っている。地域おこし協力隊の3年間をかけて漁師になりましょうとして、毎月の給料も3年間保証されて、その中で漁師になっていく準備をすればいいし、地域おこし協力隊が終わるときに100万円くらいを申請できる制度もある。そこから担い手の補助金にスライドしたり、いわて水産アカデミーの出身者であればまた別の補助金もある。きれいごとではなく、そうやって一人前になる、タコがもうかると気づくところまでつなぐことがないとだめだと思う。三陸の地域おこし協力隊で漁業をやりましょうとならないことが私は不思議だと思っている。

【回答：澤里さん】

わなの遠隔検知捕獲システムについて、私が着任した時点でもICT、IoTを活用しようという動きが大手企業を含めてたくさんあり、実際調べたり使ってみたりしたが、猟師がつくったシステムではないところが問題であった。猟師にどんなものが欲しいかヒアリングすると、わなにかかったら教えてくれと必ず言われる。そこで開発会社は午前3時にわなに入ったら、わなに入ったことを検知して通知するシステムをつくってしまう。ところが、実際に従事して、必要なのは捕獲検知ではないと気づいた。本当に欲しいのは、見回りに行かずにすむシステムであった。午前3時にわなにかかって通知を飛ばされても対処するのは翌朝である。毎朝わなに行く必要があるのかどうかを判断する装置が必要だと考えて、この機能に特化した岩泉方式の捕獲検知システムをつくった。小さな考え方の違いで、システムはかなりシンプルになる。既存のシステムは、映像で監視する方式と、センサーで捕獲のみを通知する方式の2つに分かれるが、センサーで検知する方式は、かかっているのにセンサーに反応しないなど誤動作があり、安全管理には十分とは言えない状況だった。当時の映像監視型は携帯電話の普通の電波を使うのでバッテリーの持ちが悪く、大体1週間持てばいい方であった。わなの捕獲は許可期間が基本的に2週間なので、最低でも2週間連続稼働したいということが始まりであった。

わなの状況を映像で監視することにこだわった。クマがかかっているのか、カモシカがかかっているのかで、どちらも即時対応が必要な事案だが、カモシカだったら衰弱する前に放さなければいけない。クマの場合は非常に危険な状態であることから応援によって対処する。近隣住民がいる場合は、近づかないように注意喚起しなければいけない。やはり映像でわなの状態を確認することが重要だと考え、今までの映像で監視する方式はバッテリーの持ちが悪かったが、ちょうど特殊なIoT向けの通信方式が一般でも使えるようになって、岩泉方式では1カ月以上電池交換が不要になった。電池交換のためにわなに行かなければいけない、燃料を消費しなければいけないというのをゼロに減らすことができた。また、見回りの頻度、人件費、自動車の燃料費も7割削減できた。他県でクマに近づいた人が襲われて亡くなる事件もあるなど、わなの見回りは危険を伴うが、その危険も回避することができる。

私が今月起業したのは、監視システムの販売ではなく、遠隔で監視する業務自体を請け負う会社である。例えば九州のイノシシのわなを岩泉町の会社から遠隔で監視する。九州では捕獲の担い手不足がかなり深刻で、イノシシの捕獲の報奨金が3万円近くになってしまうほどであるが、見回りに行っていた時間を全部こちらが受け持つので、わなの架設と回収に集中していただきと提案したいと考えている。

資料の1番の黄色の円内が令和5年の夏に夜間にドローンで監視飛行を行ったところである。

トウモロコシの被害があるのでクマがいることは薄々気づいていたが、実際生態を目の当たりにすると想像以上であった。多い日はこの範囲内に5頭同時に出現しており、この地区は特段クマの被害が多い場所ではないので、岩泉町内全域がこういう状態だと推測される。一番衝撃的だったのが、3番の写真を見ていただくとわかると思うが、クマは夜間に摂食行動があると考えられていたが、朝の6時ころ、農家が一仕事終える時間帯になるまで、デントコーン畑の中にいる。今まではクマに出合わないために暗い時間に出歩くなと言われていたが、実際はクマが避けてくれるだけで、時間帯がかなり重複していることがわかった。

2番の上の写真は人身事故が発生した現場であり、民家の住人が玄関を開けたところクマに襲われて、大けがを負った事件の翌日に撮影したものである。

家の後ろ側のデントコーン畑の被害が始まっているが、これはドローンで上から見てわかることであって、トウモロコシは2メートルぐらいあるので、中央に被害があっても外から見てわかりにくく、住人が被害を受けた段階では、クマの出現が予測不能な状況であった。ここから12日後が下の写真だが、畑は全部食いつくされて、左上の方のトウモロコシ畑も全滅している。

トウモロコシはお盆に合わせて作付されるので、クマの被害が発生する時期はわかっている。電気柵を張っても、クマは確かに嫌がってはいるが、食べる気になれば入ってくる。他に手がなく、もう農家は対処のしようがない。捕獲は最終手段で、ほかに手があれば選択すべきでないことはわかるが、民家の近くにはわなを設置させてほしい。だが、県の許可が下りない。許可が下りるには資料の下の写真のように、被害が外周部まで広がって、人が見てトウモロコシ畑が食われているとわかってからになる。この状態になる前の段階でも、中でトウモロコシを食べ始めている。クマはたくさんおいしいものに囲まれているので、わざわざわなの中の餌に食いつかない。本来であればトウモロコシが熟す前に予防駆除としてわなをかけて捕獲しないといけませんが、それが長年許可されていない状態である。

県や国は頭数を減らしてはいけないと安易に捕獲許可を出さないという主張だが、かといって、民家の近くに出たクマは違うだろうと言いたい。安心安全な暮らしができない状況になっているのに、クマと住民とどっちが大事なのかと。いくら訴えても決まりは決まりということで動いてくれなかった。

去年はクマの出没がひどくて岩泉町でも通常は8月でクマわなの設置依頼は終わるのだが、史上初めて11月24日まで駆除の依頼があった。駆除を専門にする人たちではなく、農家や酪農を営む方々が、きょう、わなの架設をしてくれと岩泉町に頼まれて即時対応する。各自の仕事の段取りがあるところを無理に参加しているので、負担も大きく、去年のように毎週2、3回呼ばれると本業が全然進まないというかなり追い詰められた状況になっている。去年だけであろうと期待を持っていたがすでに岩泉町で3件わなの架設依頼が入っていて、どうやら昨年と同じペースである。

4番の写真の右下の小さい丸が、クマ対策班が設置したクマわなであり子グマが入ったケースである。こういう状態で、狩猟であれば近づかないことにこしたことはないが、わな捕獲の場合、どうしても危険を承知で近づかなければならない。この写真の上の林の中に親グマが隠れていることが、ドローンの赤外線で見ると確認できる。20メートル後ろに親グマが待機している状況に突入しなければいけないのがクマ対策班の現状で、命がけの状況である。さすがに何とかしていただけないかと強く皆さんに伝えてくれと言われてきた。

【回答：多勢さん】

水産が専門ではないが、移住者の漁業者、漁業従事者の話を聞くことも多い。

カキに関してはもうかるが、漁場がもういっぱいであきがない、というのはよく聞く話である。ワカメならあいているが、繁忙期の1月から3月にはマンパワーがかかり、家族で従事している

方は家族みんなで頑張っているが、移住者は1人や2人なので、人手を集めるにもお金がかかるし、知り合いのつてもなく大変だという話は聞く。どうやったら解決できるか正直わからないが、そういった現状を聞いたことがある。

○千葉盛議員

県としては、東日本大震災津波伝承館をゲートウェイとして周遊を広げていきたいと考えている。大船渡市は観光協会や地元の人を中心になっているが、沿岸地域を見てみると、他の地域から来た方が中心になって一生懸命活動していて、地元の人たちにもう少し頑張してほしい部分もある。別の地域からそれぞれの地域のよさを発信して、いろいろなところに泊まったり回ってもらったりするような環境、地域を超えた連携がどんどん広がってほしいと思うが、県や市町村に力を入れてほしいところや支援してほしいところがあれば教えていただきたい。

【回答：佐藤さん】

みちのく潮風トレイルや三陸復興国立公園、三陸ジオパークはすばらしいエリアだと思っている。多勢さんとはトレイル関係でお会いしており、連絡会などで他市町村の事業やアイデアを聞いて刺激をもらっている。インバウンドが入ってくるということでいろいろ準備を始めており、情報交換の機会は少しずつふえていていると感じているが、連携して何かをやるという機会はあるようでないのが現実。市町村間の連携は少し足りないかと思ったところ。

観光に関しては、大きな企画であればあるほど、県外の手先コンサルタントが入って、地域には既に決まったものがおいてくるのが非常に多いと感じている。地域のよさをわかっているのはその地域で活動している人なのに、相談もなく決まったものだけやっってくださいというような形でくると、こちらは何もできず、結果ミスマッチということが多々見受けられる。大手が入ることは悪いことではないが、地域と連携してミスマッチがないように、予算などについても適正なやりとりをして、地域のおもしろさをもっと引き出していくようなことができるといいと思う。観光のお客さんが県外からもっと来るはずだったのに来ないので、地域の方々参加してもらえませんか、という話がくるととても残念で、もったいないと感じる。

【回答：多勢さん】

自治体を超えての連携は、そもそもそういう場がないと思ったところだし、場があれば成功するかというと、それはまた別な話だと思っている。

例えば、陸前高田市には、年間かなりの数の観光客が来ているが、宿泊率は低いため、泊まったり御飯を食べたりというところにフォーカスを当てたいと考えている。他の市町村がどういう狙いかはわからないが、連携が目的で始まってしまうと、皆さんが思っているようなことは実現できないため、もう少し対話をして、重なるところはウイン・ウインの関係で連携をしていくということが必要なのではないか。

佐藤さんもお話しされていたように、大型キャンペーンなどは事前にヒアリングもなく、決まってから、こういうことをやりますよというチラシで初めて知ることが多い。私たちはこういう課題を持っていて、そこにフォーカスしてこの1年間走りたいと思っているのに、それとは違うところがフォーカスされていて、考えていること、方向性のミスマッチが結構あると思っている。もちろん、私たちからも声を出していかなければならないと思っているが、事前にこういう企画をやりたいと思っているがどうか、というような提案やお話があれば、より建設的な企画になるのではないか。

○千葉盛議員

陸前高田市で御飯を食べて大船渡市に寄って内陸に行つてとか、陸前高田市に泊まって釜石市に行つて宮古市や岩泉町にも泊まってということになっていってほしいが、今のお話を聞いて、自分たちで連携していくのは少し難しい、大変だと思ったところ。そこに何かうまく手を加えられないかということ、また、そもそも話し合う場がない、場があつてもその後どうやっていくかを考えることが必要だと感じた。

○岩崎友一議員

地域おこし協力隊制度は総務省がつくつており、給料や現地の活動経費も補助されるなど、結構手厚い制度だと思うが、いずれ任期が切れた時に同じ給料をもらおうとすると、沿岸地域では非常に厳しいと感じている。現在の地域おこし協力隊制度をどう思うか。また、任期が切れると他の自治体の地域おこし協力隊に再就職して転々とする方もいるが、定住に向けて、地域の事業者はどういった工夫をしていかなければならないと思うか。

もう一点、地域のコミュニティについて、最初に回覧板の話があつたが、今の若い方々や都会から来た方々は、田舎のコミュニティ、近所づき合いになじめないことがあると思う。それをどう乗り越えていけば、地域を一体的によりよい形で日常生活を送れるか、もう少し踏み込んだところで御意見をいただきたい。

【回答：中村さん】

地域おこし協力隊になって周りを見ていて思うのは、やはり、地域おこし協力隊の人たちはこの後、何になっていくのだろうかということである。それこそ、漁師になりましょう、農家になりましょう、今度ジビエの工場ができるので、そのための地域おこし協力隊を募集しましょうなど、ミッションに合わせて用意するのであれば、定住につながるし、とてもいい制度だと思う。しかし、ミッションがぼやけているものだと、定住するための仕事がないから出て行ってしまうと思うので、そこをしっかりと設計したほうがいいのではないかと思う。

【回答：赤瀬さん】

私は山田町で2人目の地域おこし協力隊で、1人目の方はオランダ島の無人島キャンプというミッションで活動していたが、やはりそれで食っていくのは無理だということで、バイト生活をせざるを得ない状況になっている。例えば、大槌町のジビエであれば、3年間で培った技術を持って正社員になるとか、NPO法人のようなところが管理して、企業に地域おこし協力隊を派遣して、ずっとそこでやっていくとか、任期終了後は役場で正式採用するみたいなどころまでいかないと厳しいと思う。私もメインミッションはSNSで、山田町で食っていくには厳しい内容であるが、もともと山田町で起業するという前の会社からのミッションがあり、今任期中に起業まで組み立てるといふことでもがいているところ。自分で言うのもあれだが、ここまでできる人はなかなかいないと思う。3年任期で終わったら御自由という自治体が多いため、その後はどうしようという人がほとんどだと思う。また、地域おこし協力隊制度は自治体の裁量が大きく、給料や出勤体制も全く違ってくる。踏み込んで言うと担当者次第というところもあり、そういうしがらみは回避できないかと思う。

○岩崎友一議員

募集する側の出口戦略も含めて計画的にやらなければならないということがわかった。

〔回答：澤里さん〕

回覧板制度は、移住してきた方々だけではなく、長期に住まわれている御高齢の方も回せなくなってきた。岩泉町は結構広くて、隣の家に行くのに 100 メートルぐらい歩かなければならない。やはり 90 歳近い方にそれをお願いするのも酷なので、結局、比較的若い方が全世帯回ってしまおうという地区も出てきている。私はシステムエンジニアなので、常々電子化したいと考えているが、普通に業者に頼むと高齢者が使いにくいシステムになってしまったり、決め込んだシステムを入れてしまうと更新できなかつたりする。入り口だけを決めて、実装はいろいろな会社のいろいろなハードが導入できるような柔軟なシステムを、岩泉町に限らず、県内全体で仕様を固めて運用できたら、回覧板も便利なものができるのではないかと。

○岩崎友一議員

回覧板だけではなく、町内会費や赤い羽根共同募金の集金なども大変である。

〔回答：澤里さん〕

金額も 200 円などと少額で、やっと集めたと思うと次の集金が来たりして、非常に効率が悪い。年間の金額は大体決まっているので、自治体に年間分として 3,000 円ぐらいを預けて、そこから集金し、余ったら返金するとか、町内会費に充てる方式にするなど、合理化の余地があるのではないかと。

〔回答：多勢さん〕

地域に入ってくる時点で、すり合わせは重要だと思っている。こういうコミュニティがあって、こういうことを大事にしているから、暮らす上ではこれが大事だということは、入ってくる前にきちんと情報として伝えることが必要。認識しているのとしていないのとは、雲泥の差がある。私は認識した上でこちらに来たので、なじめないということにはなかった。また、ちょうど地域のお祭りがあって、そこで結構顔を知ってもらえて、誰に話をすればよいかということがわかったし、その時にライングループをつくって、いろいろ連絡することもできているので、地域のお祭りを存続させることが重要だと思う。また、連絡するにはライングループをつくってしまうのが一番早いと思う。

○岩崎友一議員

回覧板を置きに行った時に、元気とか、見守りサービスを無料でやっているようなところが田舎のいいところだと思う。そこまでなじんでもらう必要があるし、いろいろな考え方があり、押しつけるものではないと思うが、町内会に入ったらこういうことがあるという説明も大事だと思った。

○佐々木宣和議員

地域おこし協力隊の継続性にもかかわる話でもあるが、ミッションがあってスタートして、その後がなかなか続かないということもわかりつつも、やはり行政側としても地域を変えてほしいという期待を寄せて入ってもらっている部分もあるので、すり合わせも重要だと思っている。岩泉町の場合、今 27 人が地域おこし協力隊で入っていただいて、若い人がいていいという感じの空気もあって、非常にありがたいと感じている。それぞれの自治体、市町村行政と地域おこし協力隊の間で、このミッションなり進捗なりを確認する頻度や連携の仕方について、どのような形で担当者とのコミュニケーションをとりながら取り組まれているのかお伺いしたい。

〔回答：澤里さん〕

岩泉町では、報告を兼ねて、月1回、町の担当者と面談しており、私はフリーテーマのため、政策推進課の担当者と面談している。岩泉町の場合、わさび関係の地域おこし協力隊が多いが、そちらは農林水産課の担当者と面談している。結構な頻度で、毎月1時間、時間をとっていただいているので、町の担当者は大変だと思うが、こちらとしてはありがたい。行政と地域おこし協力隊の関係は非常にいいが、町民の方が地域おこし協力隊とどう接していいかわからない状況であることが少し気になる点である。地域おこし協力隊は町が呼んだ形だが、町民からすると勝手に来ている移住者であり、町民に歓迎されると思って期待してきた地域おこし協力隊の方が、町民の反応を見て、その温度差にショックを受けたことがあった。

〔回答：赤瀬さん〕

山田町では、令和5年度までは半年に1回、上半期・下半期に報告会という形でやった。山田町は地方公務員という扱いのため、毎週業務日誌をつけているので、それでいいだろうと、少し連携が弱いところがあった。今年度は、1年目の地域おこし協力隊が4人いるため、制度を変えようということで、3カ月に1回、担当者の部署等々を集めるという形に変更することになっている。地域おこし協力隊として2年過ごしてきたわけだが、所属が政策企画課で、デスクは水産商工課にあって、業務はほぼ農林課というような感じになっていて、うまくいっていない感があるため、3カ月に1回にはなったが、まだ足りないと思う。町民の地域おこし協力隊の把握率については、広報やまだを通じて、ラインを上回るスピードで情報が回るため、かなり高い。町民からすると役場に勤めている人という認識になっていて、地域おこし協力隊の人数が少ないということもあり、何をやっているのかも何となく伝わっていると思う。これが岩泉町のように人数がふえてくると、この人は誰だということになってくる可能性があるため、報告会を町民にも見てもらうとか、3カ月に1回の集まる場に町民向けの傍聴席を設けるなどになってくるかと思う。

○佐々木宣和議員

回覧板の話など、やはり視点が違う方が入ってきたことによって、変えなければならないが変えられていなかったものを変える機会になると思ったところ。

○上原康樹議員

SNSを使って発信されている方も多いと思うが、意外と遠く離れた地域から活動を見ている方がいて、いろいろメッセージが届く場合もあると思う。私もSNSで発信していて、思いもかけない方向から鋭いコメントが届くことがあり、それがいつまでも心にとどまっていることもある。皆さんもSNSを通じてもらったメッセージの中で、今も生きている言葉、忘れられない言葉はあるか。

〔回答：中村さん〕

観光協会のSNSがあるが、あまり反応がよくない。以前、漁に出た時に、夜明け前に一瞬シーンとなって海の上にピリッとした空気が流れる時があるんだよねという話で盛り上がり、私はよくわからなかったが、どうなんだろうと思って発信したところ、わかりますというメッセージが来て、そういう地元の人にしかわからないことに反応があると、お返しをされているように感じて、うれしかった。自分がやっているSNSでは、メカブをワカメから外す作業をした時に、メカブカッターの会社の方から、いつも御利用ありがとうございますとメッセージが来て、いい意味で狭いつながりがいいと感じたところ。

〔回答：多勢さん〕

インスタグラムをメインに、観光客向けに発信しているが、今は遠方に住んでいる陸前高田市出身の方にも結構見ていただいている、ふるさとの映像が懐かしいとか、震災前を思い出しましたというメッセージが励みになる。

○上原康樹議員

物理的には復興してきたが、皆様の立場からごらんになって、県が整備すべきこと、あるいはさまざまな市町村の構造的な課題など、お聞かせいただきたい。

〔回答：中本さん〕

強いて言えば、漁港を使いやすくしてほしい。船をずっと海に浮かべているといろいろなものがついてしまうため、年に何回か陸に揚げるのだが、そのための設備が漁港によって違う。私は軽トラやフォークリフトで引っ張って揚げるが、クレーンがある漁港もあるので、そういうものをつけていただけるとありがたい。

○上原康樹議員

私は今、海業というテーマに取り組んでいる。漁港らしい、漁村らしい日本の風景が非常に魅力的なものであるという認識で、それをきちんと整えれば、多くの人がやってくる、関係人口をふやすことができるのではないかとということで、国が全国にモデルケースを募り、大槌町の吉里吉里漁港が選ばれて活動を始めているところである。そういう視点から、漁港、漁村、あるいは漁業そのものの魅力を世間に知ってもらいきっかけにできるのではないかと考えて取り組んでいるが、御意見があればいただきたい。

〔回答：中本さん〕

漁港を中心とした関係について、御高齢の方々は結構港のそばで集まって雑談をしているが、南の方だと暖かいが、岩手県は寒いので、なかなか発達しにくいのかなと思う。外に出て風景を見ながら話していたほうが楽しいと思うので、例えば建物をつくって中で話す方法もあるが、お金もかかるしということもあると思う。

海業に関しては、私がいる吉里吉里漁港はモデルケースになっているが、漁師にとって何かいいことがあったかということ、正直ほとんどないというのが実情。例えば、海業のモデルケースになったからといって漁師の収入が上がったわけでもない、直販所ができたからといって漁師がそこに卸せるわけでもないという感じで、漁師としてのメリットはあまりないため、周りの人がもうかっているのかなというところ。ここをどのようにつなげていくのが大切なのではないかと思う。

○田中辰也議員

多勢さんは血縁や地縁が全く何もないところから、いろいろ検索をして陸前高田市を選んだということで、何がひっかかったのかお聞かせいただきたい。

〔回答：多勢さん〕

自分が移住したいというタイミングで、私は観光、妻はまちづくりをやりたいと思っていたところ、たまたまそれに合う地域おこし協力隊の募集が2つあったのが陸前高田市だった。また、父親がDMA Tで、震災後に陸前高田市で活動していたこともあり、御縁を感じたもの。

○田中辰也議員

いろいろな人に聞くと、沿岸部にはいろいろなものがあると言われるが、これはというものがなかなかないとも言われる。そういうアピールポイントをつくったほうがいいのか、それぞれみんな考えているのだからそれでいいのか、どのように考えているかお聞かせいただきたい。

【回答：多勢さん】

移住担当をしている妻からは、自然豊かな場所で子供を伸び伸びと育てられることは、とても受けがいいと聞くので、そこはもっと推していいポイントだと思う。一方で、移住したいと思ったが仕事がない、自分の希望する魅力的な仕事がないということで移住につながらないケースがほとんどだと聞くので、チャレンジングな仕事ができる岩手みたいなものが打ち出せると、もっと引きがあるのではないかと思う。

◆ 感想

○中村さん

いろいろな意見を聞いていただけてうれしかった。私は海業という言葉にはかなり疑問を抱いている側の人間で、言葉がひとり歩きしてしまっていると思うので、海業に負けない漁業をしっかりと築いていきたいと思う。

○多勢さん

私自身も大変勉強になった。陸前高田市のために、もっと自分ができることをやっていきたいと思う。

○中本さん

私は行政の仕事をしているわけでもなく、東京の会社の仕事をしていることもあり、正直皆さんと比べると岩手県に根づいている感じが少ないが、特に制度を利用していない者から言わせてもらおうと、同じIT業界の人でスノーボードが好きだから北上市に来たという人がいて、やはり地域の強みを生かしていると、それによって移住してくる人もいると思うので、地域の強みを生かした発信をするとういと思う。

○赤瀬さん

私はこの山田町に根づいていく会社を興すという目標もあり、ここに骨を埋める覚悟で家も買ったが、さまざまな立場からの貴重な意見を聞くことができありがたかった。ふるさと納税でトップをとれるようなものをつくっていけばぐらいに意気込んでいて、そのような生產品にかかわりたいと言ってくれる人材を引っ張りたいと思っているので、今後もいろいろと意見を頂戴しながら頑張りたいと思う。

○澤里さん

ちょうど先週起業したばかりで、このタイミングでお話を聞いていただけて、非常に幸運だと思っている。システムエンジニアは変わり者が多く、きれいなマンションに住むよりも、山の中でまきストーブがあるところに住みたいという人も多いので、意外とIT系の事業がつけられるのではないかと期待して、3年後に収益化できればいいと考えている。

○島山茂議員

本日、皆さんのお話を聞いて、心強く感じた。ぜひ地域おこし協力隊として、これからもいろいろ

ろな角度からいろいろな方と接し、発信をしていっていただきたい。今後の御活躍を期待している。

本日いただいた御意見・御提言は全議員で情報共有し、今後の議会活動に生かしていく。これからも県議会に対する御意見・御提言があったら、地元の県議会議員や県議会事務局までお寄せいただきたい。

お忙しいところ御参加いただいたことに感謝を申し上げ、閉会とさせていただきます。